告知

中町礼願

親父が他界したのは六十九歳の歳だった。その年齢は越えた。自分にとっての最低限のハードルであった。昭和二十五年生まれの七十二歳。十分もとは取った。

脳梗塞で入院したときのことを思い出す。大した用事ではなかったと思うが、車を走らせているときに、めまいのような症状を感じて脇に停車させた。それからの記憶はなかった。

後で妻に聞くと、行先も告げずに四時間も帰って来ないから何度も電話したという。やっと繋がったときの言葉は判別できないほど、呂律が回っていなかったようだ。

何とか状況を斟酌して、妻が車を走らせた。すると自宅から二キロほどの道のセンターライン寄りに夫の車を発見した。本人は脇に停めたつもりだったのかも知れないが、確実に車の往来の妨げになっている。ガラスの中の血の気の失せた顔を見てただ事ではないと判断した。

すぐに救急車を呼び、更に息子に場所を知らせて、三人来てもらった。自分が救急車に乗るためには、夫の車と自分の車を持ち帰ってもらわなければならない。息子は戻って来ていた従業員を二人連れて駆けつけてくれた。

あれから六年経過したのだ。幸いにして後遺症もなく、日常生活に支障はなかった。しかし仕事は引退した。もともと市会議員になったとき、社長業は妻に継承していたので不都合はなかった。

孫の世話や送り迎えが日課となり、季節の良いときは孫たちを連れてドライブに行く。そこでも多少のハプニングはあった。

足尾銅山に行って坑道を歩き始めた際に、急にめまいに襲われた。このときも救急車で運ばれた。小学校一年生と幼稚園年中組の孫を連れていた。

あれ以来妻や子供たちに信用がなくなり、遠出厳禁の身になった。まあ、おつりの人生なのだからのんびりやろうと決めた。

幸せなことに、下の弟が出張の度に泊まってくれるようになった。起業した会社が同じ県内であったために、毎週のように来てくれる。

そんな矢先、通院している病院に精密検査をしようと言われた。

「櫻井さん、大腸に影があるんですよね」

「ポリープとか癌ということですかね」

「詳しくは大腸カメラで調べてみることになりますが、結構大きい塊ではないかと」

「そうすると幾日か食事制限してカメラですね」

「そうなりますね。内視鏡で組織を採取して検査することになります。まあ仮にポリープや癌の場合でも開腹手術の必要はないと思います」

医師は今後の検査内容と大まかな治療方針を説明してくれた。

家に帰ると妻の美恵子が心配そうな顔を向けてきた。

「先生は何だって」

「断定はされなかったけど、多分癌だろうな。来週組織を採取するって。水を二リットル飲まなくちゃ」

「今は痛みとかないの」

「たまに腹痛を感じることはあったけどね。硬い便は通過しにくかったんだろうな。いまは慣れてしまったけど」

「検査ではっきりわかれば治療方針も決まるってことだね」

「ああそうだろう。でもやっぱり癌なんだろうな。親父は肺癌を患い、脳にも腫瘍があった。肺を片方

切除したけど、脳の方は位置が悪くて手を付けられなかったんだよな。肺の手術から五年頑張った」
「お義父さん、夜中に喉が渇いて冷蔵庫開けてね、お醤油をコップに入れようとしてたんだってね。お義母さんから聞いたわ」
「ああ、それから三日後に亡くなったんだ。つまり三日だけボケたってわけだ。それに比べて俺は脳梗塞から六年も経って癌というオチだもんなあ。でもさぁ、親父の年齢を三年もオーバーしたんだから残りは儲けもんだよ」
　美恵子には夫の内心の葛藤が見えるようだった。強がっているとは言わないが、不安で仕方ないに違いない。癌でなければいい。そう思っているのに、不安が寄せては返す波のように襲っているのだろう。
「検査結果はいつ出るの」
「来週の火曜日。それでまた内視鏡だって。脳の精密検査もするらしい。脳梗塞経験者は手術中に再発する可能性もあるんだってさ」
　そんな会話のあった一週間後、検査結果を説明された。
「結果は腫瘍です。いわゆる大腸癌というものです。正式には横行結腸癌と言います」
「悪いのでしょうか」
「ステージⅢｂということになります。これから更に細かく調べますが、転移はなさそうですので、当該部位を切除して小腸と大腸の残った部分を繋ぎます」
　医師は白紙に絵を描きながら説明してくれた。
「小腸と大腸を両方とも端部を塞いで並行させます。それでくっつけてしまうわけです。そしてくっついた中の壁部分を開けば上手く開通するはずです。もし開通しなかったり癒着の度合いでは一旦人工肛門をつけることになるかも知れません」
「あの、ステージⅢｂというのは、一般的に五年生存率とか三年生存率はどんな感じなのですか」
「ご心配ですよね。昔と違って癌は治療で治る確率が格段に上がっています。発症部位によって異なりますが、横行結腸癌のステージⅢは櫻井さんのご年齢にあたる七十代ですと、凡そ七割から八割でしょう。見たところリンパに一部異変を感じますが、他の部位への転移はなさそうですから、当該部位と一部のリンパまで切除すれば良くなると思います。今日、お帰りになる前に一階のコンビニで大腸内視鏡専用検査食というのを買い求めて下さい。三食分のパッケージになっていますので、それを再度検査する前日に召し上がっていただきます」
　こうして再度の内視鏡検査、ＭＲＩ検査等の日程を説明された。そして指定日に家族を同伴するよう指示された。
　櫻井はこうもあからさまに説明されるとは思わなかった。『やはり癌でした』と言われたときのショックは不思議なほど大きくなかった。むしろ淡々と受け止めることができた。ストレートに言われたことが、かえって医師の誠実さを感じ、素直に受け入れることができたのかも知れない。
　一瞬、妻の顔が浮かんだ。大丈夫だと言っても安心することはできないだろう。それでも事実は伝えなければならない。自分の中では現実を早くも受け入れようとしている。しかし妻はそうではないだろう。
「十日の十五時に家族に説明するって」
「どういうこと。悪かったの」
「ステージⅢのｂだって。大きいからⅢｂということらしい。こんなになるには何年も掛かったはずだって」
　夫の説明を受け止めきれない様子だ。夫が癌になってしまった。これからどうすればいいのだろう。不安だらけの目が宙をさまよっている。本来明るいキャラクターの美恵子が目をキョトンとさせている。櫻井はあと何年生きられるのか、急に不安が押し寄せてきた。
　翌日、都内で暮らしている娘から電話があった。
「お父さん、検査どうだったの」

「大腸癌だった。ステージⅢbということらしいよ。手術で悪いとこを取ってしまえば大丈夫だって」
「他も診てもらったんでしょ」
「ああ、リンパの一部が疑わしいみたいだけど、それも含めて切除する方向なんだね」
「どのくらい入院するの」
「腫瘍がでかいから当然開腹手術だろうと思ったんだけど、腹腔鏡手術で行けるって。だからまあ二週間くらいが目安かな。詳しくは再検査して最終方針を決めるそうだ」
　娘は美恵子と結婚した翌年に生まれた。もうすぐ四十七になる。つまり自分たちは金婚式まであと三年とちょっとなのだ。美恵子のためにも金婚式までは生きたいなあと思った。
「ねえ、お父さん。お母さんは落ち込んでないかなあ。大丈夫だよね」
「ああ、少し動揺していたけど、先生の説明を聞けば安心すると思うよ。処置のしようがなければ別の言い方をしたろうから。あれだけ淡々と説明をしてくれたのは治る前提なんだろ」
「そうだよね」
「次回、家族にも説明するって」
　再検査は一月五日だった。その前日は朝から例の検査食しか食べられなかった。まだお正月気分の抜けない子供や孫たちは集まって旺盛な食欲を見せつけている。
　こうなると嫌みのひとつも言いたくなる。
「あーあっ、最後に大根おろしでからみ餅を食いたかったなあ」
「退院したらいくらでも食べられるんだから。みんながお通夜みたいなご飯じゃ、かえってお父さんだって嫌でしょ」
「味の薄い検査食じゃお正月気分も吹っ飛んじゃうのさ」
「先生の言うこと聞いて早く治せば、お餅も食べられるわよ」
　美恵子は自分自身の心に宿った不安を吹き飛ばすように明るく振舞った。
　そして指定された日。美恵子と次男坊の克也を伴って病院に向かった。櫻井は息子の運転する車の助手席に腰かけた。通い慣れた病院までの道のりが違って見えた。助手席から見える枯れた田畑が物悲しく映った。涙腺の弱くなった自分を鼓舞するように大きく深呼吸したが、涙袋に溜まった憂いが景色をぼやけさせている。
　わざと大きく欠伸してティッシュを目に当てた。気配を察したように息子がラジオのボリュームを上げている。
　駐車場に入ると息子が時計を気にしだした。
「お父さん、少し遅れ気味だから急ごう」
「裏門から入れば一番近いエレベータホールにすぐ行けるよ」
「さすがに慣れてるね」
「病院なんて慣れるものじゃないけどな」
　三連休明けで人の出入りが多かった。幸いにしてエレベーターは二基とも待機していた。急いで担当医のいる四階に行くと、先生が廊下に立って看護師と話し込んでいた。
　担当の安藤先生がこちらに目を向けてきた。
「すみません。遅くなってしまい、申し訳ございません」
「いやいや丁度いい時間です。ではこちらへ」
　案内されると、パソコンには既に内視鏡検査の画像が映し出されていた。
　櫻井は妻と息子の名前を紹介した。
「どうもご苦労様です。早速ご説明致しますね」
　そう言うと映し出された画像に目をやる。
「前回大体のところはご説明してありましたので、ご家族にも伝えておられると思いますが、櫻井さんの診断結果は横行結腸癌のステージⅢbということになります。腫瘍のある位置に近いリンパも含めて、悪いところはみな取り除いて根治を目指す手術を行います。つまり悪い部分を切除できれば、日常生活

を取り戻せるということになります。内容は腫瘍が大きいので大腸の大半を切除して、小腸を肛門近くの残った大腸部分に繋ぐ形ですね」

息子が申し訳なさそうに手を挙げた。

「あの……。腫瘍はこんなに綺麗な色なんですか。もっと焦げた色を勝手に想像していたのですが」

「そうですね。癌というと皆さん爛れたような色を想像してしまいますよね。でも随分大きいという印象はありますでしょ。これでは消化物が通るときに苦しいかも知れませんね。何年もかけて育ってしまったのでしょうね。逆に進行が非常に遅いと言えるのかも知れません」

「あの、東京にいる姉が心配性なもんですから、これをスマホで写して構いませんか」

「ええいいですよ」

そう言いながら幾つかの画像を映し出してくれた。

「それで根治を目指す手術と仰いましたが、転移とか再発の可能性とかはどうなのでしょうか」

「いまのところ他の部位も詳細にチェックしましたが、大丈夫そうですね。今後定期的に検診をして参りますので、異変があればその都度調べますので。まあ経過観察しながら上手く折り合って行きましょう」

「深刻な状態ではないと考えてよいのですか」

「断定はもちろん難しいし、櫻井さんの既往症の性質上リスクもあります。脳の検査をしたのもリスク判定の一環なのです。万全を尽くして根治を目指すということです。最善を尽くしますよ」

櫻井と二人の付き添いは主治医に背中を押されて帰路についた。

今日の面談でスケジュールも確定した。

一月の十六日に入院し、十九日に手術することになった。

翌日、大腸癌の経験者が事務所に顔を出してくれた。

「カズさん、手術なんて一秒で終わるんだよ。麻酔が効いて気を失って、一秒後には灯りに気づくんだから」

「そうだね。医師にはおよそ四〜五時間と言われたけど、手術の間は意識がないんだからね」

「経験者はみんな知ってる。手術は一秒だって」

櫻井より一期先輩の元市会議員は今年喜寿を迎えるはずだ。先輩も七十二で大腸癌の手術を経験している。術後五年になろうとしていた。彼が元気な顔を見せてくれたのは大きな励ましになった。

そして手術の日を迎えた。やはり後は一瞬だった。

麻酔から目が覚めた。ふわっと浮いているような感覚と灯りが妙に真っ白に感じたのは、不安定な足長のストレッチャーに寝かされているからだろうか。とにかく目覚めたということは生きているのだと自覚した。

意識がまだ覚束ないものの、目の周りや唇、お腹のあたりも感覚がある。伸びきった足は力が伝わらない。どこも痛みはない。

先生が自分の顔を覗き込んでいる。

「櫻井さん。お目覚めですね。もう全て終わりましたよ。綺麗に取れましたからね」

「はい……。ありがとうございー……ました」

言葉が上手く出てこない。喉が突っかかっているようだ。口の中が渇き切っている。

「まだ麻酔が残っていますからね。無理に意識を起こそうとしなくていいですからね。どこも痛くないですか」

櫻井は目で頷いた。

「今日は個室でお休みいただきますからね」

また目だけを瞬きした。トイレとかはどうすればいいのだろう。今は尿意も感じないし、寒さも感じないから平気だが、夜中にトイレに行きたくなったらどうすればいいのだろう。

そんなことを朧気ながら考えていた。

知らぬ間にまた眠りについたようだ。目が覚めて周囲を見渡す。廊下の鈍い灯りがドアの隙間から入

り込んでいた。おへその辺りと両脇寄りに鈍い痛みがあった。腹腔鏡用に開いた小さな傷口に意識が行った。痛みを自覚し過ぎると更に増幅するような気がして、スマホを探そうとした。体の向きを変えることができない。手だけを動かしてみた。枕もとの棚にスマホが置いてあった。看護師さんが気を利かせてくれたようだ。

左手だけで操作した。作動すると自分の体に明かりが射して、点滴のような管が繋がれていることに気づいた。そう言えば、事前に尿道バルーンカテーテルを一晩だけ装着するようなことを聞かされていた。歩いてトイレに行けるまで付けて置くのだった。

スマホの時刻は二十三時過ぎだった。イヤフォンが見当たらないからボリュームを落として動画を再生した。自分の好きなサイトを見つける余裕はなかったので、最初に目についたものを再生させた。

イヤフォンから聞こえるストーリーと最近の出来事がグルグルと巡り、夢なのか現実なのかも理解できなかった。鈍い痛みから意識を遠ざけているうちにまた眠りに落ちた。

そして手術から二週間が経過した。前日に担当医から明日退院しましょうと言われた。本来ならもう少し早く退院できる可能性もあったが、小腸と大腸を繋いだ部分の状態を慎重に経過観察した結果だとのことだ。幸いにして人工肛門のお世話になることはなかった。目論見通りにヘアピンカーブの内側が上手く開通してくれたようだ。

三日目から相部屋になった同世代の男性は、直腸癌の手術をしたようだ。櫻井より三日ほど前に手術を終えたようだが、肛門に近い部分を切除したため、排便傷害のリスクを説明されているという。脅されたのか、今後の日常生活を悲観しているようだ。

櫻井は相部屋人の深刻な状態に引き摺られないよう、できるだけ明るく振舞った。話しかけられたときには、口角を上げて笑顔をつくった。そして決して否定的なことは言わないないよう注意した。

退院の朝、読み切った小説を相部屋の男性に献上した。

「庄司さん、ご迷惑でなかったら本を置いて行きます」

「それはありがたい。退屈してたので助かります」

「読みかけは持ち帰りますが、三冊進呈します」

櫻井が暇乞いをすると、片手を上げて応じた。庄司の目はすぐに窓の方に移っていた。

櫻井は部屋全体を見渡して深々とお辞儀した。生きて戻れることが純粋に嬉しかった。まだ病を克服したわけではないが、命が繋がった思いだ。これはおまけの人生なんかじゃない。生き続ける意味がまだあるということだ。気合を入れて歩き出すと、少し腹部が引きつるような感覚があった。

ナースステーションで挨拶し、退院に必要なファイルを受け取った。明るい光の射している談話スペースに妻の美恵子が座っていた。チェーンのついたメガネを下げ気味にスマホを凝視していた。櫻井が近づいても気づいていない。

「ご苦労さん」

びくっと肩をすくめてこちらを向く。

「あっ、お父さん。お疲れ様でした。ほんとよかった……」

美恵子の目が少し潤んでいた。退院の実感がわいた瞬間でもあった。

「会計には私が行くから外来ロビーで座ってて」

「えっ、現金持って来たのか。振込みで大丈夫だったのに」

「こういうことは早く済ませたいじゃない。大体の金額はこの前教えてもらってたから」

「そうか。じゃあ待ってる」

一階のロビーは診察を待つ人々でいっぱいだった。発熱外来は別になっているはずなので、一般外来だけでこんなにたくさんの人がいる。

病をえて通院する人や、これから入院するであろう人も様々な不安を抱えているだろう。

櫻井は一秒の手術を経験して生還する喜びを噛み締めた。本当に一瞬の出来事だった。お腹の鈍い痛みを独りで抱え込んでいた時期が嘘のように消えていた。不安の大部分は杞憂に終わるのだと改めて思うのだった。

美恵子の笑顔が「さあお家に帰ろう」と言っていた。

（了）

あとがき

何かしら健康不安を抱える年齢に差し掛かると、独りでは生きていけないと実感するものです。

この小さな物語の主人公は病をえて家族のありがたみを実感し、もう少しだけ長生きしようと前向きになりました。告知を受けて不安を抱えた人物の近未来が明るいものであることを願って拙文を認めました。

一月十六日に入院する人物も、この水源地が発行される頃には無事に日常を取り戻しているはずです。

健康の基は、家族への感謝と共感できる人がいること。感動することも大事だと実感しています。

この物語の主人公と拙文を読んでいただいた皆様の未来が明るく輝くことを願ってやみません。

――おわり――